

県外産業廃棄物の 流入規制について

東日本Aブロック 2020.02.20

- 今回のテーマ -

県外(市外)産業廃棄物の
流入規制・事前協議

10年前の調査との差異

事前協議及び流入規制制度自体は、
東北エリアを中心に変わらずある。

ただし、優遇措置も増えてきた

優良事業者認定を取得している業者や、
電子マニに対応する業者である場合、
優遇措置を設けている行政もある。



3

優遇措置の事例

岩手県

独自の優良事業者認定制度を
設け、その基準をクリアした業者には
有効期限の延長を認める。

仙台市

協議から届け出に変更。
担当者に確認したところ、
「事業者の負担を少しでも減らすため」
とのご返答。

4

流入規制の今後の見直し

流入規制は前回の調査に含まれないが、今回の調査では、ほぼすべての行政が「見直しの予定はない」との考え。

ただし、「**安定かつ適正な処理が継続されれば見直す可能性もある**」とご返答いただいた場所もある。

5

地域格差



6

各エリアの特色1

青森、岩手、秋田の三県合同で 条例を設けている。

平成11年に青森、岩手県境にて発覚した
国内最大規模の不法投棄事件がきっかけ。
廃棄物の多くが首都圏をはじめとする**県外廃棄物**
だったため、厳格な管理体制を敷くこととなる。
この三県に関しては、今後何らかの変更や緩和措置を
とる場合は、三県合同での協議が必要とのこと。

7

各エリアの特色2

東北エリアも、協議・流入規制を 設ける自治体が多い。

前述3県同様の**不法投棄**事件や、
関東以北のエリアの最終処分場に**関東方面から**
大量の産業廃棄物が搬入されることが
社会問題になるという背景。

8

事例

山形県 「二八規制」

最終処分場に県外産業廃棄物を搬入する場合、前年度の全体埋め立て量の二割を搬入可能量とする

9

各エリアの特色3

北海道では、道内での産業廃棄物を安定的かつ適正処理を行うように規制



道外産業廃棄物の搬入が不適正処理や最終処分量の増加が懸念。

また、実際に調査に行った函館市の焼却施設では、町の過疎化が進み、産業が衰退するとともに排出量自体も減少。受け入れるキャパはあるが、運搬コストなどの面で搬入には至らないという声もあった。

10

各エリアの特色4

関東エリアは規制を 設けていない場所が多い。

過去に問題があった自治体以外は、適正かつ安定的な処理が遂行されているため、**規制を設けていない場所が多い。**

例えば、茨城県では中間処理に関する事前協議の有効期間は5年、最終処分は3年と今回の調査エリア内で最長であり、一定の条件を満たせば届け出になるなど緩和措置もある。

11

本調査から分かったこと(1/2)

流入規制の見直しは、単に予定が無い自治体もあるが、**事業者から「困っている」という声がないため見直す予定が無い自治体もある。**

環境省との意見交換会の際にも流入規制の通達後、自治体からのリアクションは特にないとのこと。



12

本調査から分かったこと(2/2)

企業と行政間にはまだギャップがあるが、そのギャップは常に平行線なわけではない。

普段からのコミュニケーションや意見交換などにより歩み寄れる可能性があると考える。

この可能性は、次に述べる災害廃棄物にも大きく関係。



13

東北グリーン開発株式会社 災害廃棄物受け入れのニュース



出典: 山形テレビ <http://www.yts.co.jp/sp/news.php?no=2127>

14

災害廃棄物

2019年10月に発生した台風19号の影響で、
東日本エリアは甚大な被害を受けた。

このときの大量の災害廃棄物の処理に関して
東日本Aブロックで意見交換したところ、
今回の災害廃棄物の処理における多くの課題と問題が挙げられた。

15

災害廃棄物処理の課題

災害廃棄物の処理で重要なこと
=**適正処理**と**スピード**



この二つを保ちながら処理を行うためには、
事前準備やシミュレーションが必要不可欠。

災害廃棄物処理の連携

前述の災害廃棄物の事前準備で重要なこと

= **広域的な事前準備と
シュミレーション**



自然災害はいつどこでどの規模で発生するか予測不能。

企業と行政の連携が取れているか、**行政同士の連携**が取れているか、**事前のシミュレーション**が行われているかにより、有事の際の対応は大きく変わる。

17

災害廃棄物処理の連携

今回、受け入れの意思決定が
早くなされても、手続きの
関係ですぐに処理に移行できない
ケースが多かった。

広域的な処理が必要だった今回の
災害廃棄物で、**手続きの簡素化や
隣接する行政同士の連携、民間企
業としての備え**の大切かを痛感。



18

おわりに

この一年間ワークショップを行って思うことは、地元に行ったら聞けないような本当に重要な意見であったり、ハッと気づかされるようなことがこのワークショップの中で多くあるということです。

経験豊富な先輩方や、熱い気持ちを持った同世代がこのOB会にはたくさんいます。電話をかければすぐに答えが返ってくるようなそんな方々ばかりです。

私にとってOB会は生きた知識を得ることができる学び舎であり、大切なのはここで感じたこと、学んだことを自分自身が自分の企業なり地元の産業資源循環協会なり、行政などいかに発揮していくかだと思います。この一年、ワークにいろいろな形で参加してくださいました皆様方に心より感謝を申し上げ、私の成果発表を終わります。



ご清聴ありがとうございました。

東日本Aブロック 2020.02.20